

## 書評

## 看護現場で「教える」人のための本

教える側と教わる側のミスマッチを防ぐために

## 看護現場で「教える」人のための本

教える側と教わる側のミスマッチを防ぐために

新保幸洋



- 著 新保幸洋
- 定価 2420 円（本体 2200 円＋税）
- 判型 A5
- 頁数 176
- 発行 医学書院

評者

KGS-看護現場学サポーター

陣田泰子

## 「共育」を通してチームで「看護の探究」へ

かつて誰もが通った道であるにもかかわらず、多くの人が忘れてしまうのが、新人看護師だった時の自分である。「迷惑をかけてきたあの時があるからこそ、今の自分がある」ということを忘れなければ、著者の言う「教える側と教わる側のミスマッチ」の多くは消えていくのに……。そんなことを考えながら読み進めた本書は、「看護現場学」を提唱する私にとって、興味深い内容だった。

本書は、荒波のように絶えず動き続ける現場の真っ只中で起こっている出来事（現象）から学ぶという、いわば帰納的学習法に基づくものであり、コロナ以後の時代における看護教育の変わるべき方向性を示唆していると私は受け止めた。

## 事例を次に生かすことの難しさ

例えば、本書で「Case」として取り上げられている事例のうち、「何がわからないかがよくわからなくて、混乱している」事例や、「実際は大丈夫ではないのだが、つい『大丈夫』と言ってしまい失敗する」事例、そして、「同じミスを何回も繰り返す」事例などは、つい最近私が耳にした話とそっくりで苦笑してしまった。それだけ似たようなことが現場では起きているということだろう。

このように比較的繰り返される指導場面は、その場の学びで終わらずに本書のCaseのようにまとめ、次に生かす方法を取らなければもったいない。

しかし、実践場面の事例を分析し、第2部にあるような関連する教育原理・原則を通して実践と理論の統合を図り、自部署の教育方針と指導法を確立し実際の評価をしていくというプロセスを現場で回していくことは難しい。

目の前の現象や事象に対応していくことで精いっぱい臨床現場を考えれば、これらの現象・事象を点としてつなげて

いき、線から面へ、そして指導法という立体像にしていくのは、先輩と上司の仕事であろう。しかし、先輩と上司もさまざまな役割を引き受けておりそれどころではない。そうすると、指導係を担当したナースは「役割を果たさなければ」と必死になるがゆえに空回りしてしまう……。といった場面が必然的に多くなる。

## 看護現場での空回りを断ち切る具体的なヒント

この悪循環（いや、悪循環とは言いたくない）、空回りの循環を少しでも好循環に変えていくためのヒントが本書にはある。

例えば、Case 6 中にある「マイナスのフィードバックを与える」（p.49）ことは、指導者が頭を悩ませているテーマだが、「枕詞の使い方」「伝え方や順番」「事実に基づいた正確な情報のフィードバック」「過去の出来事を持ち出して説得を試みるのはご法度」「事前の準備と勇気」などのアドバイスが挙げられ、これらを知っていたら違った対応ができるかも、と思える。もちろん、それ以前に信頼関係が重要であることは言うまでもない（p.57）。

「教育とは、共育である」は著者の信条であり、私は看護と教育の土台は共通であると考えている。「看護」抜きの教育にってしまうことは自戒しなければならない。「仕事の意味を限定的にとらえるよりも個々の仕事に意味づけを行う」（p.138）、先輩の仕事場面を見ること・共にケアにあたること、そこから「看護についての考えの醸成」をすることが最も重要である。

「教えー教えられる」ことを通して育まれる「看護への認識と実践」「共育」は現代看護の最重要課題であり、本書はまさに「看護現場で」ここから始めるにふさわしい指南書である。